

サツマイモと遺伝資源

農研機構 基盤技術研究本部
遺伝資源研究センター センター長

くまがい とおる
熊谷 亨

昭和59（1984）年10月、鹿児島県指宿市にあった農林水産省九州農業試験場指宿試験地に着任して以降、平成23（2011）年3月まで都城やつくばでサツマイモ育種に従事し、青果用や加工・原料用など40以上のサツマイモ品種の育成にかかわり、また「サツマイモ事典」の編集という貴重な経験ができた。平成23年4月以降は、農研機構本部や作物研究所（つくば）、西日本農業研究センター（善通寺、福山）において企画管理等の業務に従事し、本年3月に定年退職となるところ、遺伝資源研究センターの話があり、4月以降も農研機構にお世話になっている。

遺伝資源研究センターが実施している農業生物資源ジーンバンク事業では、農業に係る植物、微生物、動物の遺伝資源の収集・受入、増殖・保存、特性評価、配布を行っている。現在、植物約23万点、微生物約37,000点、動物約2,000点の遺伝資源を保存している。植物では稲、麦の保存点数が多いが、近年は種苗会社からの要望が多い海外の野菜類の収集・導入に力を入れている。また、遺伝資源をより利活用していただけるよう、収集した野菜等

の遺伝資源のゲノム情報や新しい有用形質情報をそれぞれの遺伝資源に付加する遺伝資源の高度化・高付加価値化を進めている。なお、サツマイモ、バレイショは、それぞれ600、1200系統あまりの遺伝資源が、ホームページで公開されている（<https://www.gene.affrc.go.jp/>）。

遺伝資源の利用として私が思い出すのは、昭和の終わりに、指宿試験地の梅村室長（当時）が薩摩半島の農家で収集した「山川紫」など肉色が濃い紫色のサツマイモ品種である。これらの品種がなければ、「アヤムラサキ」からはじまる紫色素用品種や、最新の「ふくむらさき」につながる良食味の紫サツマイモ品種の育成はなかったかもしれない。またこの時の民間企業との連携の経験が、その後の多様なサツマイモ品種の育成につながり、今のサツマイモの世界を生み出したのではないかと思う。

このような社会を変える可能性を秘めた人類共通の財産であり、失えば二度と入手できない貴重な遺伝資源を次世代に引き継ぐ業務にしばらく携わっていきたい。